

## かいつぶり

池松 孝子

大寒に入って、殊に朝の冷え込みは厳しい。先日、朝早く小田急線で新宿へ向かった。登戸を過ぎて多摩川に差しかかったとき、あたり一面に川霧が立ち込めていた。毎日のように目にする光景だが、この日の川霧は見事なものだった。川霧は水が暖かくて、大気が寒い時の温度差で発生する。それだけ冷えた朝だったのだ。

その日、思わず立ち上がって川面を望んだ。そこに見えたのはかいつぶりだった。それを目にした瞬間、思わず声をあげそうになった。そこは電車の中、じっと我慢して見ていた。あちこち楽しそうな動きだった。かいつぶりは群れることはあまりなく、今、水面をすいすい泳いでいたかと思うと、次の瞬間直角に潜り込み姿を隠す。対岸には、二子玉川の高層ビルが朝日に輝いて見える。川面から静かな冬の朝、何とも言えない懐古の思いに満たされた。

六十年以上も前になるが、私の小学校の通学路に山陽本線と吉井川の交差する所があった。冬になると濃霧で電車が遅れることも度々であった。まつ毛が霧で白く濡れたお互いの顔を指さして、大笑いしたこともあった。

そんな寒い日の朝、霧の中から泳ぐかいつぶりがたくさん見えた。すつと線を引きいて滑走していく動きに夢中になった。かいつぶりは陸に上がることはまずない。魚をとるときはもちろん、逃げるときも潜る。親鳥が雛を背中に乗せて泳ぐのも目にした。そうしたかいつぶりの習性がおもしろく、子供には興味が尽きなかったのだろう。そんなとき、つまらない歌を歌って囃し立てたものだ。

かいつ かいつ かいつぶり かいつの尻に火がついて 隣が三軒まる焼けだ

かいつぶりは「におのとり」とも言い、古くからにおのとりが多く生息していた琵琶湖は「鳩の海」と称される。滋賀県の鳥でもある。

におどりや顔見合わせてまたもぐる

蝶夢

何と上手く詠んでくれたことかと手を打つ。かいつぶりは何の意味があつてあんなに頻繁に潜ることを繰り返すのだろう。